

弓ヶ浜クラブ

今日 あした

「なんだか気味の悪いところね」

さくらは、背筋がぞくぞくとして、ぶるぶると身震いをした。

ここは弓ヶ浜クラブ。数年前まで、「伊豆弓ヶ浜海岸・海の家」という、区内の小中学生を対象にした、臨海学校の宿泊施設だった。

近年、児童数が少なくなり、区の財政も厳しくなったので、一般の人でも利用できるように、名前もシンプルに「弓ヶ浜クラブ」に変え、リニューアルオープンしたばかりだ。

その情報を区報で知り、さっそく吉本夫婦はやってきた。

入ったとたん、プーンと、消毒薬のようなにおいが鼻をついた。

「あなた、リニューアルしたようには見えないわ。丁寧に大掃除をしただけじゃないの。学校の校舎とあまり変わらないのじゃない」

「そう文句ばかり言うなよ。広々としているし、きれいだし、いいところじゃないか」

そんな話をしながら、玄関の左手にある靴箱の前で上履きと下履きをとりかえた。ではなかった。靴とスリッパを履き替えた。

無人の受付の窓に顔を突っ込んで、さくらが

「今日からお世話になります吉本ですが、ごめんください」と叫ぶと、中からピンクのスーツを着たお姉さんが現れて、

「いらっしやいませ。二泊ですね、うけたまわっております。お部屋は階段を下りた左手の一〇五号室です。どうぞごゆっくり」と言いながらキーを渡してくれた。

「えっ、地下室ですか」

「そうではございません。この玄関ホールは二階にございます。食堂もお風呂も一階ですので、ご利用になりやすいかと思えます」

「はあ、ありがとうございます」

一階に下りて行くと、広いホールがあり、その両側に長い廊下が続いている。

さくらは夫の腕をしっかりとつかみながらあたりをきよるきよると見まわした。一〇五号室に行く方向指示に従って、左側の廊下を行くと、右手に男子用の洗

面所とトイレ、それに続いて女子用。のぞいてみると、それぞれ二十人位がいつせいに使用出来るようになっていた。

庭に面した客室も、二十畳の畳の部屋に細長い縁側があり、ボックス戸棚が付いていて、長テーブルも二個ある。

「やっぱリニューアルなんかしていないわよ。学校の校舎みたいで、康夫達が小学生の時、臨海学校で泊まったのと何も変わっていないのじゃない」

「そうだね、今でも学校行事で使われているのじゃないか」

「何だか、夜になるとお化けでも出てきそうで気味が悪いわ」

「いい年をして、なにを言っているんだい」。

そういう夫も、いつも温泉に行った時には、食後にお風呂にはいるのだが、今日はふたりで早々に温泉に浸かり、はやばやと出てきてしまった。

それにしても、誰にも会わない。秋の行楽シーズンだというのに、この広いクラブの宿泊客は二人だけなのだろうか。

「お食事の準備が出来ましたので、食堂にいらしてください」と部屋に電話があり、行ってみると案の定、百人位入れそうな食堂の隅に二人の為にテーブルがセッティングされていた。

少々場違いな感じはするが、黒のスーツに、黒の蝶ネクタイ姿の、ウエイターとおぼしき紳士が、にこやかに私達のテーブル脇に控えている。

「今日の宿泊は私たちだけですか」、さくらがウエイターに聞いた。

「はい、さようでございます」

食堂には程よくクラシック音楽が流れ、料理も二人に合わせて運ばれてくる。

ワインを飲み、前菜から始まる手のこんだ料理を美味しく頂いていると、しばし、だだっ広い食堂も、リノリウム床も忘れて、二人ともいい気分になってきた。広い窓の外は、ライトアップされ、手入れの行き届いた庭が、折しも降りだした雨に濡れて、光っている。

「事務員さんとウエイターさんとお食事だけリニューアルしたみたいね」と小声でさくら。

「隣のホテルから二人分の食事を取り寄せたのだろう」、刺身を口にはこびながら夫もまた小声で言う。

それにしても、今、この広い「弓ヶ浜クラブ」には、さくら夫婦と蝶ネクタイのウエイターの三人だけなのだろうか。夜になるとウエイターも帰ってしまうのだろうか。

夕食後に玄関の外に出た。海まで広がる暗い松林に降りかかる雨を眺めていると、又、消毒用のアルコールの匂いがある。

「どうして消毒の匂いがあるのかしら。いやだわ」

「区報に、隣の温泉病院のことも書いてあったんじゃないか」

「じゃあ、そちらもリニューアルしたのかしら」

散歩はあきらめて、二十畳の部屋に帰り、自動販売機で買った缶ビールを飲むと、夫はぐっすり眠ってしまった。

さくらは、あの長い廊下を通って、お風呂に行く勇氣もなく、せっかくの温泉なのに二度目をあきらめて、缶ビールを飲みながら本を読んでいた。

すると、部屋の片隅で、なにかがキラリと光った。

目を向けるが、何もない。少し飲みすぎたかなと思いつつ、また本を読んでいると、キラリ……どうしたのだろう、何も見えない。気のせいだろうと、本に目を戻す。

しばらくして、寝ようと立ち上がりかけたら、部屋の隅で、うっすらと女の子の影のようなものが「肥後の守」を出したり引つ込めたりしている。

あれは何だろう、そういうえば、康雄の小学校では、鉛筆を削る時は、肥後の守で削るように指導していたのだったわ、とさくらは思い出しながら、影は何だろうと近寄った。

「康雄君のおばちゃん」、女の子のような影は、おぼろげながら顔を上げて口を動かし、さくらに笑いかけた。

「ええっ!」、ぞくつとした。だが、影のように見えるが女の子だ。康雄が小さい時によく遊んでいたハルちゃんに似ている。

ハルは、小学校三年生の時、海で溺れて亡くなったのだ。詳しい事は忘れてしまったが、お焼香に行ったのは覚えている。さくらは「私が怖い怖いと思うから、死んでしまった子と現実を結び付けようとしているのだわ」と思おうとした。

「おばちゃん、ハルよ。康雄ちゃんは鉛筆、上手に削れるようになった?」

そうだ、康雄は不器用で、いつも鉛筆をでこぼこに削っていたのだわ。ハルは、隣に座っていて、よく削りなおしてくれていた。

ダメダメ、何でもハルに結び付けようとしているじゃない。さくらは首を二、三回左右に振って、

「さあ、もう寝ましょう!」、と大きな声で言ってみた。

「おばちゃん、ハルよ」

「えっ！ハルちゃん？」、もう二十年も前に亡くなっているのに……。

幽霊？ そんなのほんとにいるの？ この子は自分が死んでしまったことが、わかっていないで彷徨っているのかしら。本当に幽霊がいるのなら、このクラブには、ハルのように海で亡くなった人がうようよいるのではないかしら：：うわー、気持ち悪い。さくらは蒲団をかぶって寝てしまおうと決心して、二十畳の部屋の隅に敷いてある蒲団を見た。

だがその時、

「おばちゃん、私、だれかが気がついてくれるのを待っていたの」、と言った声が切なく、訴えるように響いた。

幽霊と意思の疎通ってできるのかしら、さくらは口を半開きにしたまま目を見張った。

「おばちゃん、お願い、ハルを助けて」

「……なにか困ったこともあるの」

さくらは半分後ずさりしながらおずおずと尝试してみた。

「うん、おかあさんがさらわれたの」

話を通じるのだわ。よく見ると、ハルは可愛らしく、ちっとも怖くなく、必死で訴えているようだった。いつの事を言っているのかしら。

「この間」

この間って、何を言っているのかしら、この子が亡くなった時の事かしら、でも聞くわけにもいかないし、と思っていると

「そうじゃなくって」

「ハルちゃんには、おばちゃんが考えていることがわかるの」

「うんそうだよ。」

そうじゃなくって、この間、お母さんが『はーちゃん』って私に手を伸ばしたの。いつもならつかめないのに、その時はお母さんと手がつなげたんだよ。ハル、嬉しかった」

「どういう事、お母さんも亡くなられたの？ お母さんはどうなされたの？」

「お母さんは、私の所に来たの。二人で空を飛んでいる時に、ブルドッグの顔の太ったおじさんがきて、お母さんを連れて行ってしまったの」

さくらの頭の中は、くるくると忙しく廻り始めた。

ハルのお母さん、何ていったっけ、そうだ、ナツさん。死にそうになったけど、踏みとどまって、この世にもどってきたのかしら。そういえば、ハルのお

父さんはブルドッグによく似た小太りの人じゃなかったかしら。

「ちがうちがう、お父さんじゃないよ。本当にブルドッグにそっくりなんだよ」

「そう……」。

ねえ、ハルちゃんは、お母さんの所に今でも会いに行くのでしょうか、今はどうしているのか、ちよつと見てきたらどうかしら」

さくらは思わずさぐるような声で言った。

「さつき行った時は、仏壇の前でお母さんは顔に白い布をかけて横になっていて、その周りでお父さんも妹も泣いていたよ。おばちゃんも一目見れば、お母さんがあの世に行ったことがわかるよ」

何を言っているのだろうこの子は。私は伊豆にいるのに、東京のことがわかる訳がないじゃないの、さくらがそう思うと……

「おばちゃん、ここで待っていて」

ハルはそう言い、姿がすーっと消えた。そしてしばらくすると、なにやら手を持ち上げて戻ってきた。

「おばちゃん、このコートを着て」

「コートって、何」

ハルが後ろに廻って、なにやらふわりと、さくらの頭からかけた。

さくらは、何かを掛けられたとたん、まわりの景色が変わってしまった。

「あら、きれいな緑色のコートね」

そばで寝ている夫が、なんだか薄暗くぼやけている。そのかわりにハルは、可愛い天使のように、浮かんでいるのがはっきり見える。これがあの世の風景なのかしらときよろきよろ周りを見ていると、

「さあおばちゃん、行こう」

「行こうって、どこに行くの」

「お母さんが、白い布をかけて寝ているところに……」

「そんな……私は……」

と言っているうちに、さくらの身体はふわりと宙に浮いている。

まあどうしたのかしら、緑色のコートの動きに合わせて浮いている。

「あらあら、ちよつと行ってくるわね」

さくらは熟睡している夫に声をかけた。

光がキラキラ輝いてとてもきれい。さっきまでの雨は、まだ降っているのに、それを遠くに見ているような不思議な気分だ。光の線が二人のまわりをながれ

てゆく。夜なのに、まるで太陽を写してキラキラ輝く海の上を雲の切れ目から降りそそぐ光のカーテンに向かって突き進んでいるかのように……。それから緑色の草原を、深い緑の森をとおりにぬけて、やがて、色の交じり合った町の一郭に入ってしまった。

「おばちゃん、ここよ、ほら、お母さんは顔に白い布をかけているでしょう」

さくらは、思わず両手を合わせて、深々とおじぎをした。しばらくナツさんとお会いしていなかったけど、亡くなられたのね。前にここに来た時には、ハルちゃんが、こんな風に横になっていたんだわ。さくらはそっと目頭をおさえた。

「おばちゃん、ここにいるのはお母さんの抜け殻だよ。ねえ、いっしょに助けに行ってくれるでしょう、ねえ」

「そうねえ」

さくらは空を飛んで来た興奮からまだ冷めやらず、次第に何でも出来るような力がみなぎってきた。

聞いてみると、ナツさんはあの世で、見ず知らずのブルドッグに似た人相の悪い人に付きまとわれて困っているみたいだけど、何とかお役に立ちたいわ。

それにここまで来ているのですもの、どんな状況なのか、見るだけでも見ておかなければ……。

さくらは元来おせっかいなのだ。

「いいわ。一緒にさがしましょう」。力強くこたえた。

二人は輝く光のなかを、緑に、青に、グレーに流れる光の帯を肌に受けながら、突き進んでいった。

さくらが、ここは海だろうか、ここは森だろうか、と見とれているうちに過ぎて行き、あたり一面茶褐色の大地の上でハルに手をひかれながら、フワリと降り立った。

どこかの惑星なのだろうか、足下は粗い砂地のようだ。遠くに同じように茶褐色でできた円筒形のものが、地面から突き出ている。

「おばちゃん、あれ、お母さんとブルドッグよ」

ハルに言われて、さくらはそちらの方に目を向けると、地平線の近くで点のようなものが飛び跳ねている。そのまわりには、身を隠すようなものはなにもないが、近寄らないとよくわからない。

「もつと近くに行きましょう」とさくら。ふたたびフワリと浮き上がって、今度は三十メートル程のところに着地する。とはいっても脚がきちんと地面をふんでいる感覚がない。

これがあの世の感覚かしら、さくらはみように感心している。

「どうして、私があなたと一緒に、行かなければいけないの」、ナツはバレエポールで鍛えた足で、男の左肩を蹴った。

男は一瞬ぐらりとして

「どうしても一緒に行くんだ。絶対に一緒に行くんだ」とナツにすごんでみせる。

「何を言っているの、私は娘と天国に行くんだから、もう邪魔をしないでよ」今度は男の腕を肩に担いでエイツとばかりに投げた。

「いやだ、どうしてもおろく」、男は素早く起き上がって駿足で回りこむと、彼女の足を両手で抱え込んでしまった。

「何をするの」、ナツは、男の頭をこぶしでたたく。

そこに、ハルが近寄って

「お母さん、吉本康雄君のお母さんと助けにきたよ」、と言いながら、さくらと一緒に、男の足にむしゃぶりついた。

だが、さくらは力が入らずに、宇宙遊泳をしている気分だ。男は身体をくると廻して二人の手をすり抜けてしまった。

ナツは

「はーちゃん、あぶないから離れていなさい。吉本君のお母さん？ ああ、さくらさん、ご無沙汰しています」と言い、ひざに力を入れて足を思いっきり振った。男は手を離し、後ろに回転しながらナツから二、三メートル離れたところまで飛んで、首を前に出し、犬のように肩を上下させながら息を整えている。

「ナツさん、このたびはご愁傷様です」。さくらは、本人に向かってこのあいさつはおかしいかな、と思った。

「ママさんバレエをやっていた私が、癌になるなんてねえ、さくらさんはなんで亡くなられたのですか」。ナツが訊ねた。

「いいえ、そうではないのですよ」とさくらが言うと、ハルが後をひきとって、ここに来たいきさつを話してくれた。

「あのブルドッグはどなたのですの」

「ふらふらやってきて、ここはどこだと聞くから、あの世だと教えてあげたら、

ずっと離れずに付いてくるのよ、まるでストーカーみたい。さくらさんにまでご迷惑をおかけしちゃって」

とナツが言い終わらないうちに、男が飛んできて、頭から彼女の横腹に体当たりをした。不意を突かれたナツは、男と一緒に五メートルほど横に飛んで転がった。男は急いで態勢を立て直して立ち上がり、両手を腰に当てて彼女を見おろし、突然大声で喋りだした。

「君と僕とは、一緒に行動しなければならぬ、その方が『よりよいあの世ライフをおくれる』と僕が保証する」

哑然としながらナツは、「どの誰かも知らないのに、何を根拠にそんなこと言っているの、どんなに保証されても、あなたとなんか、一時も一緒にいたくないわ」

「何を隠そう、僕は以前、NCTVで、プロデューサーをしていたから演出はお手のモノ。名プロデューサーがそう言っているんだ、僕に任せておけば百倍人生を楽しめること請け合いだよ、一緒にあの世ライフを楽しもうではありませんか」

「ああ、あの日本クレイジーテレビ？ おあいにく様、私は娘に早く先立たれ、バレーボールをやりながら自分と向き合って、強く、たくましく、生きて来て、やっと娘に会えたのに、なんでクレイジーの演出に付き合わなきゃいけないの」

「失礼だなー、日本クレイジーテレビだよ、共に賢く愉快にあの世生活を送る。パイオニアになろうではありませんか」

「何を気取っているの、ブルさん。顔とせりふがまったく合っていないわよ。さっきの『どうしても』からは、随分進歩したけど、そんなことならなおさら、私はご免こうむります」

「もつとよく考えてから、お返事は……………」

……………

ほんの五メートルしか離れていないのに、さくらには、二人の話し声がだんだん小さくなって、姿もぼやけて来た。

「ああ、もう朝になっちゃう」。ハルが叫んだ。あたりに白い靄がたち込め、なにも見えなくなってくる。

「お母さん、夜になったらまたくるから」ハルは、あわててさくらの手を引っぱって、もと来たところを風のように飛んだ。

「おい、さくら」、夫に肩をゆすられて、目を覚ました。

「朝食の準備ができたそうだよ」

さくらの頭の中は、まだ白い靄がかかっている。広い洗面所で顔を洗って、前の鏡を見ると、いつもとかわらぬ自分の顔がうつっているが、

「夢のはずはないわ」、鏡に向かって言った。

さくらは、夫にせきたてられて昨夜の食堂のテーブルについた。

鱈の干物にかまぼこ、わさびに野菜サラダ、昨夜の黒い蝶ネクタイのウエイターがあさりの味噌汁とごはんを運んでくる。

「よくお休みになれましたか」、と言われて

「はー」、とこたえるさくらに

「どうしたんだい、ぼーつとして、お化けでも見たような顔をしているよ」、と夫に言われ、さくらはぎくりとしてウエイターを盗み見た。この人もお化けかもしれない。

今日は、夫と二人で、下田までハイキングをすることになっている。昨日降っていた雨は、上がってはいるものの、空はどんよりしている。雨具をリュックに詰め込んで、予定通り出発することにした。弓ヶ浜から海沿いにタライ岬に向かう。こんなお天気でも釣りの人や、家族連れで、海辺の遊歩道もけっこう賑わっている。

さくらは、昨日のことを早く話したいのに、夫は木々をかき分けながら、山道をさっさと登っていく。一時間近く歩いたところで、タライ岬の突端に着いた。暗く波立つ海を下に見てやっと小休止と思っただけ、風が強くて立ってられない。その上、雨まで降ってきた。結局、降ったりやんだりのお天気の中、話もろくにしないで下田に着いた。

魚の美味しそうな店に入って、生ビールで「乾杯！」

さくらは、やっと思いつき話せると、昨夜の冒険談を一気に喋った。

「幽霊でも出るのじゃないかって、あんなに怖がっていたから、そんな夢を見たんだろう」。夫はまるで取り合わない。でもなんとしても、今夜は、夫と一緒に、ナツさん、ハルちゃん親子を助きたい。

さくらは昨日の様子を一生懸命喋った。

「緑の上着を着たら空を飛んだなんて、信じられないよ」。夫は白け切っている。「でもほんとうなのよ。着いたところは、粗い砂地で、まるで月面みたいだったわ」。さくらは必死だ。

「月面なんて、さくらは見たことがないだろう」

「テレビで見たわよ。そうだわ、月面ではなくて、前に行った敦煌から玉門関あたりの砂漠にそっくりだったわ」

最初は、中国旅行のことを思い出して、夢を見たのだと、取り合わなかった夫だったが、生ビールを三杯も飲んだあたりから、すっかり話に乗ってきた。

「砂漠にあった筒のようなものって、烽火台じゃないのかあ」

「そうかもしれないわね。今夜ハルちゃんと一緒に行ってみればわかるわよ」

「さくらはタダでそんな旅行をしてきたのか、夢でもいいから俺だって行きたいものだ」。

やつと戯言だが乗って来た。

「じゃあ、ハルちゃんが来たなら一緒に行きましょうね」

「あぁいいよ」

「やったー」

夫はかなり酩酊して、その上理由が不純だけど、さくらは約束をとりつけた。

弓ヶ浜クラブの客は、今夜も吉本夫婦だけだと、黒のスーツに蝶ネクタイのウエイターが言った。

さくらは夫を急ぎ立て早々と温泉に入り、食事も済ませてハルを待った。まだ八時頃なのに外は真っ暗。波の音と、木々のざわめきだけしか聞こえない。

部屋の明かりも暗くして、準備万端整った。目を凝らすと部屋の隅でハルがこちらを窺っている。

「ハルちゃん、康雄のお父さんよ、一緒にナツさんを助けてくれるって」、さくらは夫を振り返っていった。

「おじさんも？　ありがとう」

ハルはすっと消えて、昨日と同じように、手を持ち上げて、さくらの後ろにまわって、ふわりと何かを掛けるしぐさをした。そして夫にも。

「さくらのいう通りだね。きれいな緑色のコートだ。まわりの景色も、ぜんぜん違って見えるよ。やあ、ハルちゃん、おじさんも一緒に行ってもいいのかい」

「うんいいよ、おばちゃんが、おじさんが加わったら、百人力だって言っていたから、鬼に金棒だね」

「ハルちゃん、そんな難しい言葉を良く知っているね」。三人はにこにこしながら出発した。

お父さんをはさんで、三人で手をつないで飛んでいる。さくらは昨日経験し

たので、余裕たっぷりだが、夫はきよろきよろと落ち着かない。下を向いては「海岸線まで見えるかな」と下に引っ張るし、行く手のオーロラのような光のカーテンを、つかまえようとする。

「お父さん、あぶないから動かないで下さい！」

「おじさん、だめだよ」さくらとハルは、口々に言いながら、昨夜の砂地に着いた。

「やっぱり烽火台だ、ここは玉門関だよ、あそこに漢の時代の長城がある」

「お父さん、観光している場合ではないでしょう」

「はやくお母さんをさがそうよ」。

またしても、二人でお父さんの手を引っばる。

「そうだった」。お父さんも、タダで旅行！ の下心を反省して、ナツさんを捜し始めた。

「あの長城の上になにかいるけど、あれが二人じゃないのかな」

お父さんは視力が三・〇なのだ。

三人はすぐ近くまで飛んで、二人の目の前に着地をした。すると、ブルドッグ男Ⅱブル は、ナツの腕をつかみ、長城の上で戦闘バージョンで身構えた。

「ナツさん大丈夫ですか、これ、主人です。お手伝いしますから、早くハルちやんと天国に行ってください」

「ありがとうございます。康雄君のお父さん、よろしくお願いします」。話している、ブルはナツを連れて逃げようと飛び上がった。

逃がしてはなるものか、とお父さんも飛び上がり、ナツの腰を抱えて引き離そうとするが、力が入らない。ナツは

「康雄君のお父さん、ちよつとどいてください」と言うと、腕を掴んでいる男の手を、体をかわして捻じ曲げ、ブルンブルンと振り回して、遠くの方に、放り投げた。お父さんは、思わずぱちぱちと拍手をするが力が入らない。

ブルは、しばらく立ち上がれず、恨めしそうにこちらを見ている。どう見ても、ナツの方が、強そうだ。

「ナツさん、ちゃんと話を聞いてあげたらどうでしょうか」、お父さんは、恐る恐る言ってみた。

「とんでもない、お話にもならないわ」とナツ。

「そうですよ、あなた」。さくらまで、お父さんを睨む。

それならとナツは、

「ブルがグズグズしているうちに、遠くまで移動しましょう」、とハルに目配せ

をした。ハルは先頭に立って天国入口を目指して、グングンスピードを上げていく。お父さんはみんなの最後を飛んでいる。

後を見ると、ブルは、必死でついてくる。それを見ているうちに、お父さんは、彼が最初にナツさんに出会った時、ここがあの世界とは知らなかったとナツさんに聞いたが、広いあの世界で、ブルは迷子になっていたのではないかと思いはじめた。

そう思うと、遅れながらも死に物狂いで付いてくるブルが気の毒で、気が気ではない。

「おい、ハルちゃん、少し休憩をしてくれー」大きな声で叫んだ。

みんなは一斉に急停止をした。

「どうしたの」、とさくら。そう言っているうちに、ブルは息を切らしながら追いついてきた。

「まだ、うろろろしているの」、ナツはブルの方に向かって身構えた。お互いに、飛びかかりそうになるところで、お父さんが間に入った。

「少しだけ、お話をしましょう、ブルドッグさん、いや失礼、なんとお呼びすればいいのでしょうか」

「NCテレビに勤めている、古川です。ブルドッグで結構ですよ、みんなにブルさんと呼ばれていましたから。」と言いながら、ポケットに手を入れて

「ああ、名刺がありませんね。この恰好じゃ」とパジャマ姿で両肩を上げて手のひらを上に向け、首を横に傾げた。

「そんな方がどうしてナツさんに付きまとわれるのですか」

「私は動脈瘤の手術をして入院していました。それが気が付いたら、こんな荒野に一人ぼっちで放りだされていました。ナツさんとおっしゃるのですか、元気なこの女性に、ここがあの世界だと聞きましたね。ここで逃したらまた一人ぼっちだと思ひまして、色んなことを言ってお誘いしていたのですよ」

「ちよつと待って、より良いあの世界ライフ」なんて訳の分らない事を言って、あんな乱暴なお誘いなんて、聞いたこともありませんよ」。

途中で話をさえぎって、ナツが言った。

「まあまあ」とお父さん

「ハルちゃん、ブルさんも一緒に天国の入り口に案内してはどうだろう」

「では、ご一緒に」、とブルがおずおずと言った。

「冗談じゃないわ」。ナツはもう飛び始めている。

「私たちは知りませんよ」。さくらも冷たく言い放ち三人で飛んでいく。

「急ぎましょう、古川さん」

「なんででしょうかね。まったくお話にもなりません。すぐに暴力をふるって。あのナツ女子の腕力は、ママさんバレーではなくって、ママさんプロレスラーの間違いではないでしょうか」

「古川さん、あなたが暴力をふるったのではないのですか」

「とんでもない。必死で防戦しましたがね」

「女性と言えど、あなどれませんね」

と二人で話しながら、必死で先に行く三人を追いかけた。

「お父さん、早く早く、天国の門が閉まってしまいますよ」。

さくらが手を振りながら門の外で呼んでいる。

「急ぎましょう、古川さん」

「私は手術をした後ですから、もう走れない」

「私が引つ張ってあげますよ」。とお父さん。

さくらは二人が無事に天国の門に入り、門が締まってしまふのを見送った。

「母さん、母さん」

さくらは、康雄の呼ぶ声で起こされた。

「あら、康雄、どうしてここにいるの。お父さんは？」

「父さんは駄目だったよ」

「何が駄目なの」

「覚えていないの、伊豆にドライブに来て車ごと崖から転落したんだよ。母さんが助かったのも奇跡的だって医者が言っていたよ」

「ここは弓ヶ浜クラブではないの」

「何を言っているの。ここは病院の集中治療室だよ。弓ヶ浜クラブは隣にあるけど、もう何年も前に廃校になってるよ」

完